

メリーを追って

平熱クラブ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

私、秘封俱楽部やめるから

突如として告げられた別れ。

姿を消したメリーコト、マエリベリー・ハーンを追う宇佐見蓮子。秘封俱楽部に1人  
残された蓮子は、やがて真相に辿り着く。

彼女が消えた理由、それは

目

メリーを追つて

第2話

第3話

第4話

次

37 19 10 1



# メリーやめに

「私、  
秘封俱楽部やめるから」

それは突然の告白だつた。

「私はきっと、ここに長く居過ぎたんだ………」

そして、メリーが最後に残した言葉だつた



車が側を通り過ぎる度に起きる風の音を耳で拾いながらトボトボと歩いていた。

7月。梅雨が過ぎたかと思えば、季節の初つ端から各地で最高気温が次々と観測されていた。どうやら、お天道様は手加減というものを知らないらしい。夕方になつても、その暑さは増すばかりだつた。

「ツ…………」

お陰で汗が止まらない。額から流れた汗が目に染み、思わず右手で擦る。視界の霞が消えると、私はポケットからハンカチを取り出し、汗を拭う。

「はあ…………」

私は溜息をついた。かれこれ5時間以上は歩きっぱなしだつただろうか。お陰で疲労も限界まで来ていた。そして、喉の渴きを潤さねばならぬこともこの瞬間までは忘れていた。

「水…………」

ゴソゴソと肩掛けバッグを漁つてみるが、ボトルは既に空だつた。

「…………」

特に落胆するわけでもなく、ただ無言でそれをしまい、目の前にある歩道橋まで歩き始める。

私とすれ違う者、私を追い越してゆく者、それぞれ全く違う特徴を持つていたが、この暑さに辟易している点だけは共通していた。

汗だくで駆けていくサラリーマン、大量の買い物袋を両手にヨタヨタと歩く主婦、猛暑に愚痴を吐きながら談笑する女子高生。

それらには、さして興味も示さず私は歩いていた。

階段の部分に差し掛かると、手すりを掴みながら一段一段上つていく。カン、カン、カンと上る度に鳴る音と共に、振動が手すりに伝わってくる。階段を一段上ることに汗が吹き出していた。

カン、カン、カン、カン、カン…………

足音と共に、自身の呼吸の乱れる音が耳に届く。視界を上下させながら歩を進めていくと、頂上から夕陽が徐々に顔を覗かせる。射し込むオレンジ色の光に目を細めながら最後の一歩に足をかけ、漸く全ての階段を上りきった。

「…………」

ふと、足をピタリと止め、後ろを振り返る。見えるのは道路を目まぐるしく行き交う車の列に、自身が光っているかのようにオレンジの光を反射するガラス張りのビル群。いつもと変わらない街の風景が、余計に私の不安を増長させた。

——メリー、貴女は何処に行つたの……？

そこかしこで鳴るクラクションなど気にかけず、私は灼熱を思わせるほど真っ赤に染まる空を見上げながら、あの日の光景を脳裏に浮かべていた。

とある大学の一室。”あの告白”の後、メリーアは無言のまま、ドアを開けて部屋を出た。バタンツ……と、ドアが閉まつた後の空しい余韻、耳に木霊こだまするその音が消え  
るまで、私は動けなかつた。

私、  
秘封俱楽部やめるから

彼女の言葉をもう一度、頭に浮かべてみる。

メリーは今、なんて……

「ツ…………！」

余韻が消え、沈黙が訪れる。ここで漸く、ことの重大さを理解した。

## 第2話

しばらく、私は無言のまま立っていた。

誰もいない廊下、静寂に包まれた空間の中に私はいる。その空間を支配する僅かな間の沈黙を、私は永遠の時間のように感じていた。

「メリーアー……」

"あの告白"の後、私はすぐに部屋を出てメリーアーを追つた。だが、彼女の姿は影も形もなかつた。視界に映るのは人気のない寂れた廊下。この時、私は時間の流れを感じ取ることが出来なかつた。私の時間だけが止まり、世界の時間は変わらず動いているような……………そんな感覚だつた。

1人取り残された時間の中で、私は妙な焦燥感に駆られていた。

---

私はきっと、ここに長く居過ぎたんだ……

先程のメリーオの言葉が頭をよぎる。それが何を意味していたのかは分からぬ。  
…………だが、どうにも嫌な予感が拭えなかつた。

去り際に見せた、彼女の表情が頭から離れなかつたのだ。私が動けずにいたのは、それが原因だつた。

何かをこらえるように細めた目。光に揺れた瞳。

私を追わないで欲しい…………：

まるで、そう訴えかけているような目だつた。

ただの考え方過ぎだろう…………：そう思ひたかつた。だが、その直感が正しかつたことを裏付けるように、実際にメリーオは消えてしまつた。それでも、認めたくないとばかりに右、左と交互に見返すが、先程と景色は全く変わらない。

——ここで見つけられなければ、二度と会えないのではないか…………：

そんな気がしてならなかつた。考えれば考えるほど、不安に呑み込まれていく。その不安が、徐々に私を蝕んでいく。真っ白な布に出来た染みがどんどん広がっていくよう に、私の身体の末端までもが、不安という感情に震えていく。

その時の私の心情を表すかのように、冷たい汗が頬を流れていつた。

「マエリベリー・ハーン？」

私が尋ねた者は、全員が同じ回答をした。私は、彼女のことを知る者に尋ねたはず

だつた。だが、全員が彼女のことはおろか、名前すら知らないと答えた。

「そんなはずはない」

何度も同じ反論を繰り返したが、人々は困つたような顔をしつつ、私をあしらい、その場を去つていった。

その背を見届けたあとは、次に心当たりのある人間を捕まえ、彼女のことを探いただけ。この作業をどれほど繰り返したかは、覚えていない。

結局、誰も彼女のことは覚えておらず、1人の友人から学生課を訪ねることを勧められた私は、事務局へ向かつた。

だが、返ってきた答えは落胆と衝撃、その2つを同時に私に与えた。

「マエリベリー・ハーン、そのような名前の学生の籍は、この大学に存在しない」

何度目になるか分からぬ"反論"。

「そんなはずはない」

その一言をただただ、繰り返した。最初は丁寧に対応していた事務員も、最終的には

イラつきを隠すことなく私を追い出した。

「違う…………メリーは確かにいた。メリーは見つかるはず…………！」

私は片つ端から、心当たりのある場所へ訪れていった。先ずは、彼女の家のあるアパート。

そこに向かつたが、メリーのいた部屋が、ただの空き部屋になつたのが分かつただけだつた。そこから、街外れの丘、いつか一緒に訪れた墓地、待ち合わせの場として使われた駅、そして市役所の住民課…………

結局、何処にも彼女の存在を示すものはなかつた。

いつもと変わらない風景…………オレンジの光を反射して輝くビル群を眺めながら、私は今日という日の出来事を思い浮かべていた。

だが、記憶の何処を探つても手掛かりになりそうなものは見つからない。

「…………」

歩道橋の上で夕陽に晒されながら、スマホを取り出す。写真のアルバムを開いてみるが、メリーやの写った画像は全て消えていた。メールを開いても、彼女とのやり取りは1通も残っていなかつた。

---

また、明日探しに行こう…………

今はもう、疲労が限界まできていた。視界もボヤけはじめ、顛このかみ顛を万力で締められるような痛みが強さを増していた。

チラリと、向かい側の階段を見てみる。降りた先には、放課後にメリーやとよく訪れていた喫茶店があつた。

ふらつき始める脚を踏みしめ、そこを目指して歩いた。

この世界にメリーガ存在していた唯一の証拠、私の記憶がだけが頼りだつた。

今日、訪れた場所以外に心当たりのある場所はないのか……

疲労のためか、いつもより自分の身体が重かつた。正直に言えば、もう歩くのも嫌だつた。

テーブルに上体を伏せたまま、私は考えごとをしていた。

注文したコーヒーを受け取り、私は休憩を取っていた。

真っ暗闇の中を手探りで彷徨うような感覚を、5分…………いや、何分経つたか分からぬが私は味わっていた。

思い出せ…………何か肝心なことを忘れてはいるはずだ…………

再び汗が頬を流れ落ちた。

思い出せ…………

記憶の隅々まで探る中、何か電気のようなものが脳内を走った。

私がまだ訪れていない場所、私とメリーゴ初めて出会った場所…………

その2つの条件に該当する場所が、1つだけあつた。

「博麗神社…………」

その地を思い出すと同時に、私は呟いた。気付いた時には、既に体が動いていた

### 第3話

バシャツ!!

靴の両側から水しぶきが飛ぶのと同時に、肌に突き刺さるような冷たさが爪先に浸透してくる。

あつという間と言うべきか、街は夜闇に包まれていた。

まるで、先程までの天気がウソだつたかのように滝のような大雨が降り、水の跳ねる音が<sup>そこかしこ</sup>其処彼処から聴こえてくる。

傘など持ってきていない。

全身を大量の雨粒が叩きつけるが、それに構うことなく私は走っていた。

「ハア…………ハア…………！」

押し潰されそうな肺の感覚、上下に揺れる視界、肌に吸い付く服、一步踏み込む度に水を噴き出す靴、踏み出す度に段々と重さを増していく脚、すれ違いざまに驚いた表情で振り返る人々。

その中で私は記憶の中に残された、たつた1つの手掛けりのことだけを思い浮かべていた。

？

——まだ1つだけ行つてない場所がある…………！

それは、街外れの山奥にある場所。

——メリーは多分、そこにある…………！

それは、私がメリーと初めて出会った場所。

「ツ…………！ メリツ…………！」

博麗神社。

メリーはきつとそこにいる…………

?? ??

??

?? ??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

聴こえてくるのは、雨が木々を打つ音と自身の乱れた呼吸。  
 視えるのは、真っ暗闇に浮かぶ木々と大きな鳥居のシルエット。  
 身体はもう濡れに濡れまくつてゐるが、それが汗なのか雨なのかは判別出来ない。色が  
 変わるほど濡れた服がベツタリと張り付き、身体にズシリとした重みがのし掛かる。

「…………来るのはいつ以来だつたか…………夜だとさらに不気味ね…………」

私は博麗神社に着いていた。

---

博麗神社

それは、古来より妖怪退治を生業としてきた” 博麗の巫女 ” の住処だつたとい  
う。畠を荒らし、家屋を壊し、人を喰らい…………

そうした人々の脅威となる妖魔を懲らしめ、或いは占いや神降ろしの儀式等の依頼を  
こなすことで、巫女としての地位を代々築いてきた。  
ところが、11代目を数えるときに事件は起つた。

11代目の巫女は突如として姿を消した。

なんの前触れもなく姿を消した事実に村人たちとは、ただただ動搖するだけだつた。巫

女の他に、妖怪に対抗する術を持つ者はいない……。巫女の失踪の噂は瞬く間に広まつた。そして、恐れていた事態は現実のものとなつた。

この時を待つていたと言わんばかりに、妖怪は暴虐の限りを尽くした。

火を放ち、人を喰らい…………：

生まれたての赤ん坊の命も寿命の近い老人の命も分け隔てなく奪つていつた。阿鼻叫喚の巷と化した村。路地には腐った肉塊にくかいが散らばり、鋆びた鉄の匂いが風に運ばれた。

妖怪の躊躇じゆうりんに為す術もない村人たちはすぐさま搜索に出た。深い崖を挟んで隣在する集落、南方に位置する”おくりびやま送り火山”、妖魔が跋扈ばっこすると言われていた”れいこんとうげ靈魂峠”、川の上流にある滝裏の”なきうたどうけつ哭き歌洞穴”。

数多の犠牲を払い、決して人々が近づいてはならない禁断の領域に足を踏み入れてまで探したが、村人が何一つとして手掛かりを得ることはなかつた。

ある者は唱えた。

「巫女は妖怪に喰われた」

何者かによつて巫女は、その首を討ち取られた。これにより、自分達を脅かす者がい

なくなつたと踏んだ妖怪達は、邪魔者がいなくなつた村を襲つた。

またある者は、こう唱えた。

「巫女は我々を見捨てた」

元々、巫女は妖怪が襲撃することを予見していた。その妖怪達の力が自分の手に余ると考えた巫女は、妖怪の追つ手が迫らないよう村人達を敢えて残し、彼らを妖怪への生贊にすることで、自分が助かる目的に保身に走つたというもの。

どちらの説にしても、巫女が姿を消した時期と妖怪が襲撃を仕掛けた時期は、上手い具合に重なつていた。

こうした様々な憶測が飛び交う中、さらに事件は起きた。

巫女が住んでいた村、並びにその周囲の集落も姿を消した。人も家屋も、そして妖怪も。たつた一晩で、何もかもが消えていた。残つたのは、いま、目の前にある博麗神社だけだつた。

こうした出来事から、ここの一帯は” 神隠しの里 ” と呼ばれるようになつた——

ここまでが、この地に伝わる言い伝えだ。

言い伝え自体は現在では都市伝説のような扱いを受けており、人々の想像の域もと  
い、伝説の域を出ることはない。しかし、この博麗神社周辺は心霊スポットとしては有  
名な地域である。

”複数人で行つたら1人、行方不明になつた”

”異界に繋がる道を見つけた”

”九つの尾を持つ狐がいた”

”いきなり目の前が真っ暗になつたかと思えば、大量の目玉が浮かぶ空間にいた”

様々な目撃例や体験談が報告されているが、いずれも真偽はハツキリしない。（とい  
うより、ほぼ全ての報告がデマである可能性が高い）

私が以前に此処を訪れたのは、この言い伝えに関する情報を調べたかったからだ。結  
局、何一つとして手掛かりは得られなかつたが。

「ここまで来たら…………」

シャワーを浴びたかのように濡れた髪の水滴を、手でクシャクシャと払い落とした。  
赤い鳥居をくぐり抜けると、所々に苔が繁茂した石畳の細い道が見え、その果てには

小屋のような影が待ち構えていた。スマホを取り出し、懐中電灯の機能を使つて照らし出す。

幾筋もの細長い雨粒が暗闇に浮かび上がり、古びた小さな木造建築の境内の姿が露わになる。

それは、今にも崩れ落ちそうなほど古い神社だつた。

光が照らしたのは、朽ちて所々欠けた細い木製の四角い柱。

「…………？」

そこで何か違和感を感じた。木目もくめが動いたような気がした。それが気になつた私はそつと顔を近づけてみるが、その正体が分かつた瞬間に悲鳴をあげて飛び退いた。

その欠けた部分の内側では白い粒の行列が、縦横無尽に蠢いていた。

その一粒一粒が、黄色がかつた白い胴体に蜂蜜色の頭部を持ち、細かい数本の足や頭部の触角がバラバラに動いていた。ぶつくりと楕円形に膨らんだお尻を上下に揺らしながら、団子のようにウジヤウジヤ群がつているのが分かつた。

これがシロアリの群れと気づくのに時間はからなかつたが、それよりも早く背筋に悪寒が走つた。

その群れを見ていると、いま感じているこの悪寒の正体が、背筋をこの虫が這い上がつてゐる感覺のように思えてしまい、思わず後ずさりをしてしまう。

「ツ～…………！」

自分でも顔が引きつっているのが分かつた。しかし、ここまで来て帰るワケにはいかない。柱からそつと離れ、境内の方を向く。視界に入つたのは、ボロボロで腐つてゐるよう見える注連縄<sup>しめなわ</sup>。それに垂れ下がる破れた2組の紙垂<sup>しで</sup>。一枚一枚の紙がひし形に切り取られ、数枚ほど連なつた和紙が風に虚しく吹かれていた。

その下には、原型を留めないほどに壊れた賽銭箱が置かれており、辺りに木の破片と鎧びて赤茶けた錢が散らばつていた。

そこから視線を上げると、ボロボロに破れた障子が。先程の柱と同じく、虫が食い荒らした痕があつた。そして、その破れた隙間からこちらを覗きこむ底の見えない暗闇……

「メリー…………？」 いたら、返事して!!」

私の声は虚しく響いただけだつた。

部屋の中を調べようと、階段に一步踏み出しが、踏みつけた階段の木材がバキバキと割れる音が響いたので、一度断念する。

危険が付き纏う探索は好きな部類だが、流石にこの、今にも崩れそうな神社に踏み入る勇気はない。

この神社の心当たりのある場所があるとすれば、目の前にある境内だつたのだが、今

にも崩壊しそうな建物に上がり込むとは考えにくい。…………だとすれば、メリーアはこの建造物の中にはおらず、この周辺に身を隠している可能性がある…………そう考えた私は、この建物の周囲を探すことにした。

博麗神社での搜索を始めて何分、いや何時間が経過したか分からぬ。何度、彼女の名を叫んだか分からぬ。そして、どれほどの間、雨に打たれていたのかも分からぬ。しかし、ここまで人らしい姿は一切見当たらなかつた。

悪寒が肌に突き刺さる一方で、身体の内側では灼熱が渦巻いていた。

頭が割れるような痛みが襲い、視界がぼやけ始める。

「メリー!!  
お願いだから出てきて頂戴!!」

意識の薄れを覺ますかのように私は叫んだ。

「メリイイイイイイ!!!!」

結局、自分の声が周囲に木霊するだけだつた。

「…………」

ザアアアアアアアア……………

耳に入つてくるのは、雨が降る音のみ。

結局…………希望を託した最後の手掛けよりも、何も意味はなかつた。

私、秘封俱楽部やめるから

私はきっと、ここに長く居過ぎたんだ…………

去り際に、メリーが残した言葉。

彼女が姿を消した理由は分からなかつた。彼女が姿を消したこと納得がいかな  
かつた。

せめて、話だけでもしたかつた。私の知らないところで、一体何を抱えこんでいたの

か……。このまま二度と会えなければ、私はこの後悔を一生引きずるだろう

「メリーハーパー」

そう呟いた時だつた。

「こんばんは」

聴こえてきたのは、背後から。

メリーハーパー？

しかし、「それはない」とすぐさま考えを否定する。そもそも、声が全くの別人だつたからだ。

それでも…………と、ほんの僅かな期待を抱いて振り返る。が、案の定私が探していた人物ではなかつた。

幾房毎に赤いリボンで纏めた腰まで届くブロンドヘアに、妖艶ようえんさを放つ紫の瞳と表情。瞳と同色の前がけをつけた白い衣を身に纏い、赤いリボンの巻かれた白の帽子をかぶり、右手で薄桃色の傘をさしていた。

「貴女も…………幻想を信じる人間なのかしら？」

ゾツとするほど妖艶な笑みを浮かべて、こちらに歩み寄る。

「…………誰？」

「幻想を統べし者…………八雲紫やくも ゆかりですわ、初めまして」

「…………」

八雲紫と名乗つた女性。見た目は、二十代頃の人間となんら変わりは無い。だが、その妖艶さ故か、どこか人外じみた雰囲気を纏つていた。人間のものとは思えない、その美貌。陶磁器のような真っ白な肌に、柔らかな桜色の唇。宝石をはめ込んだような瞳

は、人を虜にしてしまうには十分なほど美麗だつた。

私は黙つたまま見据えていた。その美しさに見惚れていたのかもしない。だが、一つ、気になつたことがあつた。

「この人、メリーや似てゐる……？」

なんとなく…………なんとなくだが、そんな気がした。

彼女は、メリーや何かしらの関わりがあるのでないか……？

メリーや似てゐる。ただそれだけで…………根拠と言えない根拠をもとに、私は彼女に尋ねた。

「…………貴女、メリーやを知らない……？」

…………この辺りで、貴女みたいな金髪の子を見かけなかつたかしら？」

八雲紫は、表情を変えずに答えた。

「あら、そちらは名乗つてくれないのね。まあ、知つてるから別にいいけど

…………」

「あ……」

すみません…………と謝罪しようとしたが、一瞬だけ、思考が止まる。

何故、私の名前を知っているのか。

当然だが、面識など全くない。

私が抱いた疑問に答えることなく、紫は続けた。

「貴女が言うメリーという子…………マエリベリー・ハーンが、” どうなつたか ” は知っていますわ。捜していったのでしょうか？だから、この博麗神社にまで貴女は足を運んだ」

「…………」

やはり、彼女はメリーと何かしらの関係があつた。

自分の予想が当たっていたことに、ちよつとした安堵を得ると同時に、また疑問を抱く。

何故、「マエリベリー・ハーン」というフルネーム、私がメリーを捜して聞いたことを知つているのだろうか。

そうした疑問が湧くと同時に、ようやくメリーの手掛けりを掴めた戸惑いと嬉しさが込み上げてくるが、ここでまた、彼女の言葉が引っかかった。

わ

マエリベリー・ハーンが、”どうなつたか”は知っています

” どうなつたか ”  
” 何処にいる ” ではない。 ” どうなつたか ” だ。  
まさか……！

「あの子はどうだ!? 教えてちようだい！」

思わず気が動転してしまい、彼女に詰め寄り、肩を揺さぶっていた。

——このままでは、メリーガ危ない。

今は、その気持ちだけが私を動かしていた。

しかし、彼女は激しく揺さぶられても表情一つ変えずにいた。  
「…………離してくれないかしら？ 教えを乞うなら、それなりの礼儀を弁えて欲しい  
わね……」

「ツ…………！」

ギロリと、射抜くような視線を向ける瞳。先程、私を突き動かした焦燥感。それは彼女の放った威圧の前に、呆気なく消え去った。

34 第3話

「……………ごめんなさい」

肩から手を離し、後ろに数歩さがる。私は、次の言葉を待った。

「ま、いいですわ。取り敢えずは話しましょう。先ずは、あの子が何者なのかについて話さねばなりませんが…………」

「…………？」

何者なのか…………？

それはメリーについてのことなのだろうか…………？　なぜ、メリーが何かしらの秘密を抱くかのような言い方をするのだろうか…………？

疑問符ばかりが浮かぶ私に構うことなく、紫は衝撃の一言を放つた。

「マエリベリー・ハーン…………それは、私が自らの手で作り出した完全自律人形。

宇佐見蓮子、貴女を殺す為にね」

直後、視界が真っ白な光に包まれ、落雷の音が聴覚を支配した。

## 第4話

「何を言つてゐるの、貴女…………？」

それが、嘘偽りのない感想だつた。

メリーガ人形…………？ 私を殺す為に作つた…………？

説得力の「せ」の文字もない一言に、私は混乱するばかりだつた。

「聞こえなかつたかしら？」 マエリベリー・ハーンは、貴女を殺す為に私が作つた人形  
よ

「…………」

サツパリ意味がわからない。メリーガマネキンでもなんでもない、ただの人間だ。單  
に頭がおかしいだけなのか…………？ そう考えながらも、いま一度、紫の言葉を頭の中で  
繰り返す。

—— 完全自律人形

それは完全な自我を持った人形のことを指しているのだろうか。例えばユダヤ教の伝承に残っている、意志を持つた泥人形の”ゴーレム”に、ヨーロッパの鍊金術師が作り出したと言われる”ホムンクルス”……

実を言えば、私自身その手の類の言葉に馴染みがないワケではない。だが、それは創作物や伝記に限つての話だ。実際にそのような人形の開発に成功した例など聞いたことがない。

自我を持った人形との遭遇…………非現実的な事象にロマンを抱く普段の私では、胸が踊るような気持ちでいたに違いない。もつとも今の私に、そんな気持ちには微塵も湧かなかつたが。

——何より、この女は何を考えている……？

人形を作つたのは私を殺すためだと言つた。一体何のために……？

「まあ、信じる信じないは貴女の勝手だけど私は事実を語るだけ」

「……私を殺す為と言つたけど、何が目的なの……？」

もし、コイツの話すことが事実ならメリーは私を殺すために仕向けられた刺客だつたということになる。

メリーとはそれなりに長い付き合いだつた。当然だが、そのような素振りは一切見ら

れなかつた。お互に憎まれ口を叩くことはあれど、仲違いすらしたことはない。秘封俱楽部の仲間として、本音を語れる数少ない友人として共に時を過ごしてきた。故に、紫の言葉が信じられなかつた。いや、信じたくなかった、というべきか……。

紫の語る事実を否定しきれなかつた。

メリーハーの本名に、面識がない筈の私の名前、私がこの博麗神社を訪れた目的など、本来なら知るはずのないことを知つていた。こうしたところを見ると、でまかせを言つているようには思えなかつた。

「それは……貴女の存在が邪魔だからよ」

何より、メリーハーが存在したことを示す証拠は私の記憶以外全てこの世界から消えていた。にも関わらずメリーハーを知つていたところを考えると、彼女がメリーハーの失踪と何も関係がないという方がおかしい。

「何故私が邪魔な存在なの？ そもそも面識すらない筈の私が……」

その問いを受け、紫はジツとこちらを見据える。ほんの数秒の間、沈黙による支配が続いたが紫がそれを破つた。

「貴女…………宇佐見董子の家系の人間でしよう？」

「…………!?」

何故、そんなことまで知つているのか……

宇佐見董子。それは、私の曾祖母にあたる人物であり、秘封俱楽部初代会長にして創設者。

私はその曾祖母に会つたことはない。私がこの世に生を受けた頃には、既にこの世を去つていた。

「彼女には、色々と迷惑を被つたものでしたわ」

だが、祖母から彼女の話はよく聞いていた。祖母はこの地に伝わる伝承やおとぎ話をよく聞かされていたらしい。妖怪、幻想、神秘……世には存在しないあらゆる不可思議をまるで自身が体験したかのように語つていたという。

「迷惑…………？」

「ええ、彼女の手によつて” 幻想郷 ” は危機に晒された」

「…………」

祖母は語つた。宇佐見董子はかつて、存在を忘れ去られた者達が集うといわれる楽園を訪れたことがあつたという。人々に忘れ去られ、幻想となつた存在が行き着く果て……その名を” 幻想郷 ” といつた。

—————まあ、所詮は作り話さ……

祖母の言葉が脳裏に浮かぶ。だが、いまの私に、その意見に賛同出来る自信はなかつた。

八雲紫……

いま、目の前にいるこの女が見事に打ち碎いた。

「存在を忘れ去られた者達が流れ着く楽園、幻想郷……。董子は、決して相容れない筈の二つの世界を繋ごうとした」

「二つの世界……？」

「ええ、そうよ。現実の世界と幻想の世界を……」

つまりは、いま私がいるこの世界と幻想郷が繋がつたということだろうか。

「それが何か都合の悪いことなのかしら？」

「全くもって悪いことですわ。彼女のしたことは二つの世界を隔てる結界の破壊、コレは幻想郷の破滅を意味するんですもの」

「ここで、私の頭の中で点と点が線で繋がつた気がした。

「つまり、私を殺そうとしているのは宇佐見董子がしでかしたことへの報復つてどこかしら？」 その為にメリーアを作つたと？」

「報復だなんて、人聞きの悪いことを言わないでもらえるかしら？ コレも幻想郷を守るために必要なこと。それに、私が貴女を始末しようと思つたキッカケはそれだけではありませんのよ」

紫は、バツと開いた扇子で口元を覆い隠す。

「事件そのものは何とか解決したからいいの。その発端となつた彼女も幻想郷の仲間として迎え入れた。色々落ち着いたあとに、よく遊びに来ていたわね」

「……そこまで大きな事件を起こしておいて、お咎め無しと？」隨分とお優しいようで

「幻想郷は全てを受け入れるのですわ……それはそれは残酷なことに……」

扇子で口元を覆い隠しながら、クスクスと笑う。私の苦手なタイプだ。

「……とはいって、幻想郷が受け入れてもその主たる私が受け入れられないことがあるのも事実……。董子は、のちに再び大きな異変を起こしたこと……取り返しのつかないくらいのね……今度ばかりは、幻想の世界から追放させて貰つたわ」

「……で、2度も大きな事件を起こしたことが報復の理由というワケ？」

ピクリと、眉をひそめたのが見えた。

「報復ではないと言つてはいるでしょう？　まあ、それが理由であることに変わりはないわね。……ただ、私が貴女を始末すべきと断じた1番の理由は違う」

一瞬、紫の目が光つた。コレは比喩ではなく、妖しい紫色の光が目にハツキリと宿つていた。

パチンッ!!

大量の雨が降る中、扇子が勢いよく閉じられた音が響いた。

「かつて消えたはずの秘封俱楽部を貴女が復活させた……その事が私に決断を下させ

たのよ……」

「…………」

私が秘封俱楽部を発足させた理由……それは、宇佐見董子への憧れだった。人が未だ至ることのなかつた神秘への到達……それが私の夢だった。確かめたかつた。

——もし、宇佐見董子の話が本当なら彼女はどんな世界を見てきたのだろう……？

そんな想いで立ち上げた秘封俱楽部。科学が発展したこの時代、他人から笑われるのは当然のことだった。科学が築いてきた絶対的な事実の証明……そんな世の中で希薄になつてゆく幻想的な存在へと辿り着きたかった。そうした中で巡り合つた同じ志を持つ友、それがマエリベリー・ハーンだった。

「単に秘封俱楽部が再び発足したというだけなら何も問題はない……しかし、発足させたのがその宇佐見董子の家系の人間だったこと、それが問題なのよ」

「その私が董子と同様、幻想郷を再び危険に晒すかもしれない…………それで送られた刺客がメリーダつたと……？」

「そんなところですわ」

「……」

これまでのメリードの思い出が次々と浮かんでくる。無愛想な顔、怯えた顔、笑つて

いる顔、メリーガこれまでに見せてきた表情がハツキリと蘇つてくる。その中に、私への殺意が感じられた表情など一切なかつた。

——メリーガ本当に私を殺そうとしていたのかしら……？  
——紫の話すことが本当であれば、今までメリーガ何故……？

紫を疑う気が少しずつ湧き始めたときだつた。それは突然脳内に木霊した。

——私、秘封俱楽部やめるから

——私はきっと、ここに長く居過ぎたんだ……

メリーガ最後に残した言葉。最後に見せた表情。それは彼女が姿を消した答えを示していた。

メリーガ私を殺すために作られ、刺客としてこの世界に送られてきた。だが、彼女は私と時を共にすることで本来の目的を忘れてしまつていた。それが何かしらのキツカケを経て思い出されたが、今更彼女に私を殺す決断を下すことなど出来なかつたのだ。

だから、私の前から姿を消した。

だから、「私を迫らないで欲しい」と目で訴えた。

「それで……メリーガいま、何処にいるの……？」

雨の音にかき消されそうなほど、か細い声だつた。それが聞こえたのか聞こえてないのか、紫は口を開いた。

「あの子は私の元へ戻つてくるやいなや、泣きついてきたわね…………『私に蓮子は殺せません……!!』って。『私は何でもします。だから蓮子の命だけは……！』なんて、駄々をこねていたわ。それこそ才オモチヤをねだる子供のように……」

一度言葉を途切れさせたかと思うと、紫は何か思い出したように付け加えた。

「いえ、子供みたいというのは間違いかしら…………額を床に擦りつけるなんてことは大人しかやらないもの」

「…………」

何か……心臓を殴られたような感覚だつた。メリーアはあまり感情を表に出すようなタイプではない。そんな彼女が、取り乱す姿など想像できなかつた。

——マエリベリー・ハーンが、” どうなつたか ” は知っています

わ

再び、不意に紫の先程の言葉が脳裏をよぎる。そして、不安がまた私の中できつく渦

巻く。

” 何処にいる ” ではない。 ” どうなつたか ” だ。

「それでメリーアはどうなつたの……？」

大雨が地を打つ音よりも、自分の心臓の鼓動がハツキリと耳に届く。紫はジッとこちらを見据え、少し間を置きながらその質問に答えた。

「使えない人形をいつまでも側に置いているワケないでしょう？ 私がしつかりと処分してあげたわ」

鼓膜を破るような爆発音と共に、一瞬だけ世界が真っ白に染まった。まるで、空が今私の心情を代弁するかのように。

一時、私の心は世界と同様真っ白に染まつた。何もない空っぽの心。そこは空白だけが存在していた。どこまでも広がる虚無。感情も何も浮かんで来なかつた。何もないというよりは時が止まつたと言い換えるべきか。時が止まつたまま、静寂だけがそこに漂い続ける。その瞬間が永遠に続くかと思われた。

だが、歯車は止まらない。隙間に挟まれた石は破壊応力を超えて粉碎され、再び歯車が動き出す。熱く煮えたぎる何かが私の理性を焼き始めた。

ドンッ…………

何か鈍い音が耳に届いた。気が付くと、私は胸ぐらを両手で掴みながら紫を柱に押し付けていた。

「アンタ……！ メリーがどれだけ苦しんだと思って…………！」

メリーゲ最後に見せた表情。彼女は私を守るために姿を消し、紫に殺された。親友を

殺したくない葛藤に苛まされた彼女の気持ちを考えるだけで、段々と憎悪が湧いてくる。その憎悪は、彼女をその手にかけた紫、そして彼女の苦しみに気づくことが出来なかつた自分自身に向いていた。

ギリギリと歯を噛み締めながら、更に力を加える。だが、紫は一切表情を変えていかつた。

「アンタがメリーや殺したなら、私がアンタを殺すッ……!!」

理性と人格の崩壊。それを肌で感じながら、持てる限りの力で殺意を紫に向けた。身体中の筋肉がミシミシと音を立てる程に力を振り絞っていた。全く動搖していない彼女の表情が更に私の怒りを搔き立てた。

「アンタだけは絶対に……！」

「黙りなさい」

紫の声が冷たく響いたかと思うと、喉が一気に締まる感覚と足が宙に浮く感覚が私を襲つた。

「グツ……!!」

紫の手で首を絞め上げられているのだと、ようやく理解出来た。見た目に似合わずとんでもない馬鹿力を持っていたものだ。

足を前後に動かしてもがきながら、両手で紫の手を掴む。

「カハツ……！」

首を絞める力は一向に弱まりそうにない。咳き込む度に、喉の痛みが強くなる。視界に映る自分の手が段々と白くなつてきているのが分かつた。

「最初からこうするべきだつたわね……」

紫は首を掴んだ左手とは逆の手を、私の額に向かつて伸ばしていた。全身が酸素を渴望しているせいか、腕や足が痙攣を起こし始めていた。

「安心しなさい……貴女もすぐあの子の元へ送つてあげるから」

「ツ……！」

紫の右手が額に届いた瞬間に視界が徐々に歪み始める。それと同時に全身からスーッと力が抜け、身体の感覚が少しづつ消え失していく。

「さよなら、蓮子…………」

それが、私が最後に聞いた声だつた。

「紫様……本当にこれで良かつたのですか？」

紫様とその足元に倒れる少女を見つめながら、私は問いかけた。

「コツソリ跡をついてくるなんて良い趣味してるわね、藍？」

「申し訳ありません……ですが、紫様はこれで良かつたのですか……？」

紫様は少し眉をひそめながら答えた。

「何度も言つたでしよう？　こうでもしなければ私の決心がつかないって。どのみち、蓮子とは別れる時がすぐに来たわよ。人間は短い間しか生きられないもの。それに、早く私に戻つてもらわないと困るのは貴女でしよう？」

[ ... ]

「さ、戻るわよ」

紫様はそう言うと、ソッと手をかざし空間にスキマを作り出した。そのスキマの中か

ら大量の目玉がこちらを覗く。紫様はその中へと飛び入った。

本当にコレで良かつたのだろうか……

紫様は大きな嘘をついた。まず宇佐見董子は2度も異変を起こしていない。この世界と幻想郷が繋がりそうになつた異変を起こしたのは事実だが、異変の解決後は幻想郷の輪の中に混じつていた。特に、異変の解決に従事した博麗の巫女らと絆を深め、確かなものを築いていた。

だが、のちに歴史を大きく動かす出来事が起つた。

それまで何度も幻想郷を守つて来た博麗の巫女は戦いの中で死に至つた。かつて"吸血鬼異変"を引き起こしたその残党が幻想郷全土を巻き込む異変を起こした。当時、異変が起きた際は、死者が出ることのない決闘法が主流だった。しかし、その異変の主犯達はあくまで暴力に訴え出た。

異変は紫様の手によつて終わりを迎えたが、幻想郷の守護者たる博麗の巫女を失つた代償は大きかつた。

彼女の弔いは人妖問わず盛大に行われた。ほぼ幻想郷全てと言つていいくほどの人間や妖怪達が参列した。その中で、式を中心となつて取り行つたのが宇佐見董子だつた。

紫様は心の底から彼女に感謝していた。その日から、二人は一緒にいることが多くなつた。董子が幻想郷を訪れる度に紫様が自ら出迎えにいくようになり、1日と共に過

ごすようになつた。まるで、博麗の巫女という友人が欠けてできた穴を互いに埋めるよう……。

董子が紫様の傷を癒す存在だつたのは明白だつた。

だが、その時間は長くは続かない。董子も博麗の巫女と同じ人間。つまり、妖怪と違つて生きていられる時間はごく僅かなモノだつた。宇佐見董子という友人をも失つた紫様の姿はとても見ていられるものではなかつた。

紫様は冬になると、深い眠りにつく。ところが、董子が亡くなつてから冬眠の時間が格段に増えた。

紫様は冬眠の間、夢を通す形で別の世界へ行くことができる。董子が亡くなつてからは、彼女が元々いた世界へ行くことが多くなつたそうだ。

そして、ある日私は紫様に呼び出された。

——私はしばらく…………というより長い間、眠つたままだと思う……

その日から、私は幻想郷の本格的な結界管理を任せられるようになつた。もう一人の管理者たる博麗の巫女は吸血鬼が再び起こした異変が起きてから代が途絶えていた為、一切の責任を背負うこととなつた。

それから何年か……紫様が目を覚ますことはなかつた。向こうの世界で何かあつたのだろうか……？ そう考えた私は、紫様がいる世界へと向かつた。

しかし、そこにいたのは記憶を失くした紫様だった。彼女はマエリベリー・ハーンを名乗り、宇佐見董子の曾孫、宇佐見蓮子と共に過ごしていた。

紫様は夢の中もとい董子がいた世界に長くいすぎたせいで記憶が混乱し、自分が元々この世界の住人であると思い込むようになってしまっていた。

最初は好奇心だつたらしい。信頼を築いてきた董子の曾孫が秘封俱楽部を復活させたことを知った紫様は、蓮子がどんな人間なのかを確かめたり、マエリベリー・ハーンという仮の姿を作り上げ、彼女に接触を図った。

董子がいなくなつた悲しみを忘れ、蓮子との日々を過ごす紫様の邪魔をするのは私自身苦しかつたが、幻想郷の管理には彼女の力がどうしても必要だつた。だから、マエリベリー・ハーンに八雲紫としての記憶を呼び覚ませた。

自身が八雲紫であることを認識した彼女は、秘封俱楽部及びこの世界から姿を消すことを決意した。境界を操る能力を使って自分がいた痕跡を消していく。

蓮子の記憶だけ残したのは、紫様の温情だつた。せめて記憶だけでも残そと。

しかし、紫様には一つ懸念があつた。もし、その記憶を辿つて幻想郷にまで来てしまつたら………

いまの幻想郷は結界に歪みが生じており（だから紫様を連れ戻したのだが）、元の世界に帰れる保証が無かつた。

そこで、紫様は試した。もし、蓮子がマエリベリー・ハーンを追つてくることがあるなら、共に過ぎした記憶を消す。現に、宇佐見蓮子はここまで追つて来てしまった。そして、たつた今紫様によつてマエリベリー・ハーンの記憶が消去されたのだ。

ザアアアアアアアア……………

大雨によつてできた水たまりに前のめりに倒れ伏す宇佐見蓮子。他に誰も傷つかない別れの方法があつたのではないだろうか……

吸血鬼との戦いで命を落とした博麗の巫女、はくれいれいむ博麗靈夢に、初めて幻想郷以外の人間で心を許した宇佐見蓮子……

これまでに経験してきた人間との別れ……

紫様は人との交わり方を学べても、別れを迎えるのがずっと怖いままだつたのかもしない。だから、このような結末を迎えてしまつたのだ……

未だに意識が戻ることなく、倒れたままの少女にチラリと視線を向ける。  
「…………」

私は無言のまま、スキマの中へと足を踏み入れた。